



植柳の風

八代市立植柳小学校 校長室便り
平成31年1月15日 NO. 122

教育の2020年問題

どんどやでにぎわった日曜日だった。今年も、竹の竿の先に網器をつけ、竹輪やお餅、いもなどの食べ物を炎で焼きながら家族で食べる微笑ましい光景が球磨川河川敷のあちこちで見ることができた。小雨降る中の前日の準備は大変だったが、燃え盛る炎の周りに集まった人たちの笑顔を見ると、そんな疲れも吹っ飛んだ日曜日であった。



さて、そんなお正月恒例の和やかな風景とは裏腹に、緊張して過ごした人たちもいる。先週末から始まった受験シーズン。県立や私立中学の受験をする児童にとっては、ハラハラドキドキの週末だっただろう。さらに来週は大学入試センター試験が控えており、家族に受験生がおられるご家庭もピリピリとした緊張が走っているに違いない。格言の一つに「学べば学ぶほど、自分が何も知らなかったことに気づく 気づけば気づくほど学びたくなる」という言葉があるが、勉強にはまればはまるほど、「無知の知」に気づく。だが、焦りは禁物。やるだけやって後は天命を待つ心境も大切である。いずれにしても、心からのエールを受験生たちに贈りたい。

大学の入試改革がテレビや新聞で取り上げられ、「教育の2020年問題」と呼ばれていることは耳にされたことがあると思う。現在、行われている大学入試センター試験(通称：センター試験)は、来年2020年1月をもって廃止される。代わって、2020年度からは新テストが行われるが、基本的には、現在のように共通テスト+各大学実施の個別試験という仕組みは同じ。だが、出題傾向や内容には大きな変化がもたらさせる。一つは、国語と数学で「記述式」が導入されること。これまではマーク式試験で、「知識」などの学力の「量」を問うことが多かったが、思考力・判断力・表現力を見るため、複数のデータやグラフ、資料等から考え、答えを導くような、いわゆる学力の「質」を問う問題が増えてくる。

なぜ、このような大学入試改革が叫ばれているのか？ AIの普及など、変化が激しく、また予想しづらい未来を生きていく子どもたちにどのような力を身につけさせるべきかという命題から、今回の教育改革は始まっている。つまり、「知識の習得」を中心とした従来の学習から、「知識の活用」を目指すスタイルへと大転換することが求められており、この改革の成否は、現場の教師の意識改革にかかっているといっても過言ではない。「2020年からの教師問題」の著者 石川一郎氏は、「いままでの教育は、教師が一方向的に教えることが主体で、いわゆる『TEACHING』中心でした。これからは、学ぶ者、児童生徒が主体となって学び合う『LEARNING』が必要。つまり、『正解のない問い』について、考えるための環境や人間関係を教師がプロデュースし、互いに高め合えるようにする授業改革が必要です。」と述べている。



「もしあなたがザビエルだったとしたら、布教のために何をしますか。具体的な根拠とともに、400字以内で説明しなさい。」石川氏の本の帯にあった言葉である。この帯の言葉の上には「あなたの学校の先生は、この問題を教えられますか？」という挑戦的なフレーズが添えられていた。「本校の先生たちは大丈夫！」とすぐに心の中で応えた。そして、これからの学校の姿や授業の様子に思いを馳せたことだった。